

7歳の少年の長崎被爆体験記

一家団欒の日々を奪われて

松永 信一

私は、昭和13年、長崎銭座町で生まれました。父は、長崎三菱兵器工場所に勤務し、母と兄弟7人の9人家族で、楽しく暮らしていました。

昭和16年12月、日本はハワイの真珠湾を空襲攻撃で、アメリカ海軍や空軍に大打撃を与えましたが、その後、日本軍は敗北し、昭和20年の3月には、東京大空襲、硫黄島玉砕と続き、4月には、米軍が沖縄に上陸し、同月には、長崎市内が米軍のB29 大型爆撃機により、毎日の様に、空襲を受けていました。

当時、長崎市内では、造船所と兵器工場が何カ所もあり、毎日の様に爆撃がありました。そのつど私達家族は、家の中の床の下に、防空壕を掘って、その中には、布団や食料品を入れていたので、その中で寝泊りをしていました。

長崎市内には、他国軍の捕虜収容所があり、また、アメリカ軍はキリスト教と聞いていて、長崎市内には、キリスト教の信者が多く、教会も多かったのですが、このようにアメリカ軍から、攻撃されるとは思いませんでした。

そして、昭和20年8月9日、午前11時2分、一発の原子爆弾により、長崎の町は壊滅的な打撃を受けました。

私が被爆したのは、稲佐国民学校の小学2年生の時でした。学校は夏休みで、その日の天気は晴れでした。午前10時から10時半ごろ、突然、空襲警報のサイレンが鳴り響きました。家の前の大きな楠の木でセミ取りをしていた私は、慌てて家の中の防空壕に逃げました。しばらくすると、解除のサイレンが鳴ったので、私はひとり屋外に出て縁側で寝転んでいたら、突然、金比良山から大橋方面に、飛行機が飛んで行ったのが見えました。

空襲警報が解除になっていたのですが、日本の飛行機と思っていた。その間、2～3分。突然、空がピカーッと光って、その後、ものすごい音でドーンという大音響と共に、高



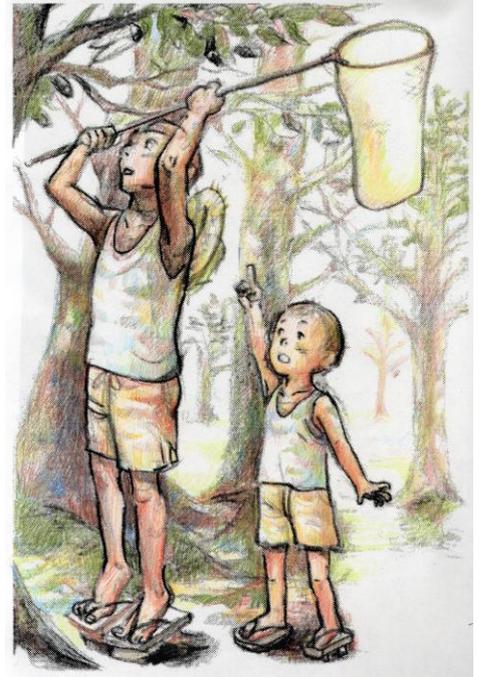
熱の光が私の体に降り注ぎ、次の瞬間、爆風で飛ばされました。一瞬のうちに家がつぶれ、着ていた服は黒く焦げていて、休中が熱くて、気絶するほどの痛みが襲ってきました。一体、何が起こったのか、何でこうなったのか、もう、頭の中は考えることすらできませんでした。家族は全員、防空壕の中において無事でしたが、私の家は、爆心地よりわずか2キロのところであり、私はそこで被爆、頭と両手、両足にひどいやけどを負い、目も見えなくなってしまいました。

まわりからは、「信一は助からんとじゃなかとね」とつぶやく声が耳に入り、私は、あまりの恐怖と、熱と痛みになされ続けるばかりでした。さらに、熱のため、のどが焼けるようにかわき、水がほしいと母に訴えましたが、「今、水を飲んだら死んでしまう」と言われ、一滴の水さえも、口にすることができませんでした。

当時、病院も薬局もなく、傷口の上から包帯がわりに布をまき、市内から約 25 キロ離れた母の実家に行き、アロエ、じゃがいもなどを小さくすりつぶし、傷口につけ、薬がわりにしていました。しかし、やけどの傷があまりに臭くて、包帯のすきまにハエがたかっている、うじ虫が数匹いたのを見つけ、母がすぐにとってくれ、ハエが来ないように包帯で傷口をぐるぐる巻きにして、傷口をふさぎました。母は、負傷した私の看病をしながら、子どもたちの世話をし、1日かけて歩いて、つぶれた家のあと片付けに行き、週に一度帰宅していました。

やがて、終戦を迎え、半年後、父が戦地より戻り、しばらくすると、家も住めるようになったので、家族は家に帰ることになりました。負傷している私は、治療のため、母の実家にとり残され、まだ幼い私にとって、両親や兄弟と別れて暮らす毎日は、淋しく、辛いものでした。

ケガが完全に治るまで、2年かかりましたが、やけどの傷は今でも残っています。原爆の傷は一生残るそうです。痛みも治り、私もようやく家族のもとに帰ることができました。そして、久しぶりに家族団らんの幸せを、子ども心に嬉しく思ったのもつかの間、妹が生まれましたが、母の母乳が出ないため、生後6ヵ月で亡くなり、今度は母が放射能の影響で突然亡くなりました。34 歳でした。戦争さえなければ、原爆が落ちなければ、母も妹も死なずに、我が家は一家団らんで、過ごしていたと思います。母が亡く



蝉取り 画：松本明日香

なって以来、我が家には、2度と一家団らんの日はなくなりました。

原爆は、体や建物だけではなく、その人の人生や歴史をも、壊滅させました。

原爆は市街地ばかりでなく、多くの人を無差別に殺傷し、死者7万4千人、負傷者7万5千人、その内、小学生5千8百人、中学生1千9百人の、幼い命が奪われました。一面、焼け野原と化した町のあちこちに、黒こげの遺体ごろがり、水を求めて浦上川へ飛び込み、息絶えた人の山、まさに、この世の「地獄」そのものでした。



浦上川の惨状 画:中島正徳 長崎原爆資料館提供

原爆の恐ろしさは、爆心地では、あまりの高熱のため、一瞬のうちに焼死したり、爆心地から約4キロ離れたところでも、屋外にいた人はヤケドを負うほどでした。

さらに強烈な爆風は、一瞬のうちに、家や建物、街路樹、そして牛や馬といった動物までもが、原形をとどめないほど、破壊されました。そのうえ、4キロ以内で、被爆した人は、無傷であっても放射能の影響で、多くの人が死亡したり、人体の奥深く傷つき、後になって「白血病」や「悪性のガン」などを、ひきおこしたりしています。

戦後、64年が過ぎても、あの日の出来事が、心の傷として残り、今なお、原爆障害に苦しむ人も多く、私たちは、原爆投下の8月9日を決して忘れることは、できません。同じ、長崎出身の妻と、結婚し、5人の子どもに恵まれましたが、妻は、甲状腺のガンになり、昨年、再発し再手術、息子も40代の若さで、甲状腺のガンにかかりました。原爆の影響がないとは、いえるでしょうか？

私は今でも元気でいますが、内臓を悪くした時に、病院ではなかなか原爆の影響であるとは、認めてもらえないのが現状で、私もいつ発症するか不安です。

今、世界には、2万5千発の核兵器があるといわれています。広島・長崎での、惨劇のあとも、大国の核実験は繰り返されています。名もなき多くの庶民の、被爆という犠牲のもとに・・・

人々はその被害に苦しみ続けています。今こそ、核兵器のない世界を強く求める世論のうねりが必要だと思います。

本当は、原爆のことは、人に話すのは辛いものでしたが、私たちの心の変革こそが、核兵器のない世界をつくと確信して、一日も早く核のない平和な世界をと、また、二度と核戦争がないようお願い続けて、今語り部をしています。